後期ウィトゲンシュタインにおけるポイントについて

大谷弘（東京女子大学）
谷田雄毅（大正大学）

『ウィトゲンシュタインースキナー手稿』（Gibson & O'Mahony 2020）第四章において、ウィトゲンシュタインは、文の「ポイント」について論じている。そこでウィトゲンシュタインは「どのようなケースで文はポイントを持つのか」という問いが、「どのようなケースで我々は何かを言語ゲームと呼ぶのか」という問いに帰着するとしている（Gibson & O'Mahony 2020, p. 154）。ここに示唆されているウィトゲンシュタインの考えは、言語ゲームが成立するためには単に言葉の使用が存在するだけでなく、使用のポイントも存在せねばならない、というものである。したがって、ウィトゲンシュタインの言語観を把握するためには、単に言葉の意味と使用の結びつきを強調するだけでは不十分であり、「ポイント」という概念の内実を解明する必要がある。

ポイント概念が後期ウィトゲンシュタイン哲学における重要概念であるということに関しては研究者の間でも一定程度、認識されている。とりわけ、ウィトゲンシュタインに影響を受けた哲学者たちは、しばしばその哲学上の重要な箇所でポイントという観念に訴えている。例えば、マイケル・ダメットは、真理概念のポイントを主張において目指されているものであるという点に存するとし、そこから自身の反実在論を展開している（Dummett 1959）。また、アブナー・バズも問いがポイントを持つという点を強調している。そして、そこから彼は、分析哲学の認識論における思考実験の中で出される問いが、ポイントを欠く不適切なものとなっていると論じ、そこからそれらの思考実験に基づく哲学的理論の適切性に疑問を投げかけている（Baz 2012）。

他方、ポイント概念をウィトゲンシュタインのテキストに即して解釈し、その内実を明らかにするという作業はほとんど行われていない。ダメットやバズは－彼らの目的からすると当然のことではあるが、－ウィトゲンシュタインのテキストの詳細な解釈を基礎としてポイント概念を解明するという課題に関心を示していない。また、ウィトゲンシュタイン研究者たちによるポイント概念を主題とする研究も、いくつかの重要な例外を除いては（cf. 谷田 2021, 2023）、ほとんど見当たらない。

本発表ではこの先行研究の欠落を埋めるべく、ウィトゲンシュタインのテキストに即して、そのポイント概念の内実を解明することを目指す。具体的に扱うテキストは、『哲学探究』（Wittgenstein 2009）563 節から 568 節、『ウィトゲンシュタインの講義　数学の基礎編　ケンブリッジ 1939 年』（Diamond 1976）の第 21 講、『ウィトゲンシュタインースキナー手稿』（Gibson & O'Mahony 2020）第四章である。このうち、『哲学探究』と『ウィトゲンシュタインースキナー手稿』の議論は簡潔であり、そこでウィトゲンシュタインは「ポイント」という語を単に「目的」という語と交換可能な仕方で用いているようにも見える。しかし、『ウィトゲンシュタインの講義　数学の基礎編　ケンブリッジ 1939 年』（以下、『数学講義』）においてはより詳細な議論が展開されている。

『数学講義』第 21 講においては、戦場において矛盾した報告を受け取るがただそれを受けいれる将軍、薪を底面積に応じて売買する人々、九本の棒を奇妙な仕方で分配する人々、などの我々とラディカルに異なる仕方で実践を遂行する人々が想像される。ウィトゲンシュタインによると、それらの実践の理解できなさは、そのポイントを見出せないということに存する。例えば、薪を底面積に応じて売買する人々に関して、これらの人々は同じ体積の薪に関して、底面積が変化するように積み方を変えると異なる値段をつけることになってしまう。このため、我々はその活動を「薪の売買」という活動として理解できなくなってしまう。この意味で、その活動のポイントを我々は見出せないとウィトゲンシュタインは考える。

ここで重要なのは、これらの実践の規則は問題なく理解できている、ということである。例えば、我々も底面積を計算することで、その人々が特定の薪の束にどのような値段をつけるのかを計算することができる。しかし、それでも我々はその活動のポイントを見出すことができないのである。

このような『数学講義』のテキストの検討から見えてくるのは、ポイントとは単に「目的」と同一視できるような概念ではなく、発話がそれを持つことで言語ゲームが人間的活動となるような秩序を与えるものだ、ということである。この点を押さえたうえで、残る二つのテキスト、すなわち『哲学探究』（Wittgenstein 2009）563 節から 568 節と『ウィトゲンシュタインースキナー手稿』（Gibson & O'Mahony 2020）第四章に向かうならば、そこでもポイントとは、単に目的と同一視されるものではなく、言語ゲームを人間的活動として理解させるものとして捉えられていることが見えてくる。本発表では、この点を更に詳細なテキストの分析により明らかにする。

本発表の意義は、（1）後期ウィトゲンシュタイン哲学のキーワードである「ポイント」の内実をウィトゲンシュタインのテキストに即して明らかにし、それを通して、（2）言語ゲームを人間的活動として捉えるべきだということを示す、という点にある。

文献表

Baz, A. (2012). *When Words are Called for: A Defense of Ordinary Language Philosophy*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Diamond, C. (1976). *Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics, Cambridge 1939*. Chicago: The University of Chicago Press.

Dummett, M. (1959). Truth. *Proceedings of the Aristotelian Society*, 59. Reprinted in M. Dummett (1978), *Truth and Other Enigmas* (pp. 1-24). Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.

Gibson, A. & N. O'Mahony (eds.) (2020). *Ludwig Wittgenstein: Dictating Philosophy to Francis Skinner - The Wittgenstein-Skinner Manuscripts*. Cham, Switzerland: Springer.

谷田雄毅 (2021). 「ポイント(Witz)とアスペクト(Aspekt)－言語ゲームの意味を問うとはどのようなことか」『現代思想』第 49 巻 16 号、199-210 頁。

谷田雄毅 (2023). 「後期ウィトゲンシュタインにおける、 言語ゲームの「ポイント(Witz)」概念の位置づけ― アスペクト概念との比較を通じて」『哲学』第 74 号、171-188 頁。

Wittgenstein, L. (2009). *Philosophical Investigations*. Fourth edition. P.M.S. Hacker & J. Schulte (eds.), Oxford: Wiley-Blackwell.